

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫



◆◆◆ No.0793 ◆◆◆

24/06/12

【 懸念される朝鮮半島情勢、アジアの地政学リスク高まる 】

北朝鮮と韓国との関係が過去最悪ともいえる状態にある。かつてアジアにおける地政学リスクの筆頭と言えば、「中国と台湾」関係だったが、ここに来て「朝鮮半島情勢」をより警戒する向きも増えつつあるようだ。両国が今後戦闘状態に陥るといった見方をする向きは、正直まだ少数派。しかし予断を許さない。実際に軍がぶつかり合うような状況になれば、日本も「他山の石」などと暢気なことを言っていられないだろう。今回の当レターでは、アジアの地政学リスクについてレポートしてみたい。

<< 北朝鮮 >>

韓国の文前政権は、北朝鮮との融和を積極的に進めたことで知られる。というより、自国民よりも北朝鮮を優先させる政策などをとってきたわけだが、いずれにしても 2022 年に政権交代が起こり、尹体制になってから対北政策が一変したことは間違いない。その結果、当然の帰結として韓国と北朝鮮関係が悪化に向かうことになるわけだが、気になるのはここ最近の動きだ。関係悪化がさらに加速している感もある。

典型事例は、一般メディアでも伝えられている北朝鮮による韓国への「汚物風船」飛ばしで、これに韓国が対抗。北朝鮮がもっとも嫌うとされる、南北の軍事境界線付近で大音量のスピーカーを使った宣伝放送をなんと 6 年ぶりに行ったという。

また、それとともに韓国政府は 2018 年に北朝鮮と結んだ「軍事合意効力」を、すべて停止する方針を確認したとも発表。さらに、合意で禁じていた南北軍事境界線付近での射撃訓練などを行う方針も明らかにしている。北朝鮮が先にケンカを売った格好で、韓国とすれば「売られたケンカを買っただけ」ではあるものの、両国衝突に向けたギアが一段上がってしまったと言えそうだ。緊張感はさらに高まった。

そうしたなか、筆者が北朝鮮情勢の専門家に話を聞いたところ、実際の衝突についても「危機意識を持つておく必要がある」との回答を得た。前述専門家によると、北朝鮮といえば少し前まで中国にべったり。相思相愛といった雰囲気もあったが、このところはむしろロシアへの擦り寄りが著しく、中国依存が目に見えて落ちているのだという。これを逆に言うなら、かつては中国の言うことをよく聞いた北朝鮮が、ここ最近では単に離反するだけでなく「ほぼ制御不能に陥っている面もある」(前述筋) そうだ。

つまり、中国としても本音では北朝鮮の最近の暴走を苦々しく思っている面があるものの、不幸なことにそれは止まる気配に乏しい。相次ぐミサイル発射や人工衛星の打ち上げを成功させ気をよくしているなか、新たな後ろ盾であるロシアに唆される格好で、北朝鮮が最後の一线を超えてくる可能性もゼロではないだろう。

かつて安倍元首相が「台湾有事は日本有事」と述べ物議を醸したことがあったが、「韓国の有事」はまごうことなき「イコール日本有事」だ。最悪の事態も一応考慮しておく必要がある気もしないではない。

<< 中国 >>

今年 1 月の台湾総選挙で勝利を収めた民主進歩党、頼清徳新総統の任期が 5 月 20 日にスタートした。頼氏は就任演説で「対中政策の現状維持」路線を継承する方針を示したほか、日米欧など国際社会と連携を深めていくと考えを改めて表明している。

そして、今月 5 日には早速、米政府が台湾に対して、F16 戦闘機の関連部品などあわせて 3 億ドルの売却を決めたとの発表も観測されていたことは周知のとおり。

しかし、当然ながらこうした動きを快く思っていないのが中国だ。頼氏の就任直後、人民解放軍の東部戦区は台湾の北部、東部、南部の海域で 2 日間にわたる軍事演習を行うなど、猛烈な軍事的圧力を掛け続けているうえ、先の米政府による台湾への武器関連品売却計画にも強く反発している。中国国防省は「台湾海峡の平和と安定を大きく壊す」などと反発したうえで、計画の撤廃を求めたことが明らかになった。台湾情勢が日に日に悪化しつつある感も否めない。

一方、それとは別に中国とフィリピンの関係も悪化の一途にある。

